佳作

新平家公達草子（しんへいけきんだちぞうし）

男女縁西海扇（にせのえにしさいかいあふぎ）

二幕二場

安樂井（あらい）　薫（くん）

新平家公達草子
男女縁西海扇

あらすじとねらい

第一幕

寿永三年二月、平家の一門越前三位通盛卿は、摂津国一の谷に陣をまかされ、三草山の合戦に勝利し、勢いに乗る源義経軍を迎え撃とうとしている。

しかし、通盛の傍らには、源氏に与する所の猟師熊王丸が妹・若菜を間者にして、通盛を籠絡、陣中の様子を探るよう命じる。若菜は、兄の命に従い、矢文で連絡を取り合う。兄からの矢文が届いたところを、通盛の乳母子・滝口時員に見咎められ、嫌疑がかかる。そこへ、酔態の通盛が現れ、事の仔細を問い質す。しかし、通盛は若菜の口車に乗せられて、時員の言葉を信じない。見かねた時員が通盛に諫言すると、怒りだす。その様子を、陣中近くの藪の中から熊王丸がうかがう。

宵になり、新中納言平知盛の固める須磨の陣から、二位尼の使者として、通盛の妻・小宰相が一の谷の陣へやって来る。時員の取次ぎで通盛と会うが、通盛は戦出立に臨んで、一の谷には来るなと言ったはずと小宰相を叱る。小宰相は、須磨の陣中に、帝とともにおわす二位尼の使者としてやってきたことを告げ、また、夫の身が案じられたと漏らす。これを聞き、通盛は激怒、未練な女を妻に持つのは通盛一生の不覚と言い、その場で離縁を伝え、若菜を女房にすると言う。これを聞き、小宰相は、通盛の子を身籠ったと伝えるが、夫の言葉を翻そうとする戯れ言と一蹴。ゆかりの檜扇を持って立ち去れと言う。しかし、これらはみな、源氏の間者・若菜の裏をかく通盛一人の計略、心と言葉は裏腹だった。小宰相は、思い昂ぶり、檜扇をなかば引き裂いて陣屋を後にする。

夜が更けて、若菜を訪ねて熊王丸がやって来る。落ち合う兄妹。兄は、よくやったと妹を誉め、まもなく義経軍の攻撃が始まるから陣屋を立ち退けと言うが、若菜は厭だと言う。通盛の妻になると言って、熊王丸と諍いになる。そこに通盛が現れる。通盛は熊王丸の素姓を質し、若菜が兄を家来にしてほしいと言う。驚く熊王丸。通盛はそれを許し、この辺りの猟師だと言う熊王丸に鵯越のことを尋ねる。しかし、なかなか様子を語らない。兄の態度を見て、若菜は鵯越の獣道を、通盛に伝え、通盛は義経の計略を推し測り、装束を褒美に兄妹を陣屋から追い立てる。

装束を脱いだ通盛は、甲冑姿。熊王丸は謀られたと思い、妹

を連れて逃げようとする。そこへ小宰相が義経軍攻撃開始を知らせに戻って来る。小宰相に斬りかかる熊王丸の刃を、身を挺してかばったのは若菜だった。若菜は、苦しい息のもと、通盛の心に感じ入り、兄を裏切ったと。また、間者として通盛を騙した罪の報い、通盛の子を宿す小宰相をかばい、命を捨てたことで自分の思いを伝える。通盛と小宰相は、若菜に対し、心から礼を言う。それを聞いて若菜は絶命する。

通盛は、時員に小宰相を託し、一の谷から須磨へ落とす。入れ違いにやって来た源氏の兵士と熊王丸、実は鷲尾三郎義久との激しい戦闘の中、通盛は一の谷の陣において討死する。

第二幕

平家軍は須磨の陣を追われ、淡路の瀬戸に御座船で逃れる。小宰相も帝を守り、船の上から、源氏の軍兵を迎え撃つ。そこへ、時員が加勢に漕ぎ寄せ、軍兵を討ち果たす。

小宰相は、時員を御座船に招き、通盛の様子を尋ねる。時員が、通盛の最期を伝えると小宰相は号泣する。それを聞いて、二位尼、安徳帝、大納言乳母、治部卿局が姿をあらわす。時員は、二位尼の言葉に、通盛の最期を語りはじめる。おわると、再び戦に行くと言う時員に、二位尼が餞の盃をとらせると、屋形の中に招く。時員は通盛の形見の扇を小宰相に渡し、屋形の中へ。

一人になった小宰相は、形見の檜扇を見て、入道相国清盛公の故事にあやかり、扇で夫の魂を招くと、通盛の霊が現れる。通盛の霊は、小宰相と別れを惜しみ、再び海に消える。小宰相は、夫の魂を慕って、入水に及ぼうとするが、二位尼が止める。そして、通盛卿の子を産んで、そののち夫の菩提を弔うように説得。小宰相を御座船から下ろし、時員の案内で比叡山横川に赴かせるのだった。

戦乱によって運命を翻弄される人々の、互いに互いを思い合う心、また、ゆえあってすれ違う心が生む悲劇、命の尊さを作品に込めました。

【参考文献】

名作歌舞伎全集　第二・四・五巻　東京創元新社
新潮日本古典集成　謡曲集下　新潮社
新日本古典文学全集　平家物語2　小学館

第一幕　一の谷越前三位平通盛陣屋の場

役　名

越前三位平通盛
通盛妻・小宰相
猟師・熊王丸　実ハ鷲尾三郎義久
侍女・若菜
通盛乳母子・滝口時員
平家方の郎党三人
源氏の侍十人

本舞台、高足の二重、本庇本縁つき、白洲梯子。軒に、赤地に揚羽蝶の紋ちらしの幕を張る。正面、銀地の襖に揚羽蝶の紋。上手、一間塗骨の障子屋体。その前に桜の立木。そこここに、矢の立つ仕掛けあり。上手に柵矢来。下手に藪畳。いつもの所に陣門。すべて一の谷平通盛陣屋の体。ここに郎党三人いて、幕開く。

郎党一　この度の三草山の合戦では、九郎判官義経、夜討をかけたというではないか。

郎党二　夜討も夜討。戌の刻より、近隣在所に火をかけたる大松明、三里も離れた平家の陣へ、瞬く間に攻め寄せたとか。

郎党三　なんでもその時陣屋の内は、戦は定めて明日のことと、皆々高枕の夢心地。

郎党一　そこへ源氏の軍勢一万騎が押し寄せ、御一門は散り散りばらばら。

郎党二　この一の谷へも、源氏の軍勢時を移さずなだれ込もうという風の噂。

郎党三　ううっと、首のあたりが俄かに寒くなってきた。

郎党一　臆病風に吹かれたな。

郎党二　したが、勢い勝る源氏とはいえ、一の谷のこの陣は、めったなことでは攻められまい。

郎党三　なるほど、後ろに鵯越をひかえる限り、判官とて容易くは攻められぬ。

郎党一　いやいや、相手は名うての戦上手。

郎党二　この陣屋とて油断はならぬ。

郎党三　しからば警護怠りなく。

郎党一・二・三　そうだ、そうだ。

ト、郎党三人、下手に入る。

〈津の国の一ノ谷は、南は渚、北は山。名にし負う鵯越をそびらにして、守るにやすく攻め難き。かかる陣屋をまかさるる平家の公達、越前の三位通盛卿。木の芽も春の如月に咲き匂いたつ風情の武者。心急かるる桜木も、時世の風に堪えかねて咲くより先に散る花は人のさだめを思わする。

ト、このうち、上手の桜の立木に射込んだる矢文突き立つ。

〈気配に一間を抜け出でし侍女若菜が忍び足、気配り目配り縁に寄り、花散る桜それと見て。

ト、侍女・若菜、好みの拵え、上手障子屋体より忍ぶ体にて出、上手の桜の立木に矢文を見て思い入れ、梯子を下り、矢を抜きとる。このうち、上手より滝口時員、上下衣装、大小にて出、若菜に目を留める。若菜、矢を隠し持ち、梯子を上りかける。

時員　これは若菜殿、お待ち召され。

ト、若菜、ふり返り、矢文を隠すこなしあって、

若菜　ホホ。

時員　フフ。

若菜　ホホ。

時員　フフ。

両人　ハハハハハ。

〈愛想笑いに紛らわし。

若菜　これはこれは、誰かと思えば時員殿。御警護御苦労に存じまする。

時員　九郎判官、三草山の勝利に乗じ、越前の三位通盛様がお守りなさるこの一の谷へ押し寄せんも間近と聞けば。

若菜　ナニ、その御心配には及びますまい。陣屋の北には人馬も通わぬ鵯越の断崖絶壁、襖屏風の如く聳え立ち、いかに源氏の兵でもどうにも手出しかないますまい。

時員　とはいえ判官は名うての戦上手。三草山も大松明の奇策によって、我が一門は出し抜かれしぞ。かかる絶壁のあるからとて、油断のならぬ九郎義経。

若菜　それも杞憂の取越し苦労。たとえこの坂落としを軍勢下り来るとても、この陣屋のあちらこちら、用意の撒き菱、落とし穴。

時員　女子ながらに陣屋の仕掛、かくまでも御承知とは、

〈侍鋭き目を侍女に向け。

抜け目のない御奉公。

若　菜　コリャ私としたことが。こんな所でうっかりお喋り。

〽と行きかかるを。

ト、このうち、若菜、矢から文を抜き、隠すこなしある。

時　員　アァ待たれよ若菜殿。チト尋ねたきことがある。これに、これに。

若　菜　ソリャどのようなお尋ね。

時　員　今、この桜より抜き取りし矢文の趣、それを答えてもらいたい。

若　菜　矢文など、わしゃ知らぬわいな。

時　員　お惚けめさるな。今後ろに隠し持つ矢文のことだ。

若　菜　ナニ矢、矢とはこれでござりまするか。

〽ぽんと投げる憎々しさ。時員きっと手に取れば、まだ文も見ぬ矢の有様、さてはと侍、侍女に詰め寄り。

時　員　最前抜き取る矢先の許、確かに目にした結び文。サ、いずれへやった、どこへ隠した。

若　菜　知らぬわいな。

〽と捨て置く言葉、立ち退く若菜遣るまいと、襟髪つかむそのところへ。

ト、梯子を上り、若菜に詰め寄り、両人争うこなしあって、時員、若菜を取り押さえる。この時、奥より越前三位平通盛の声あって、

通　盛　何をざわざわ騒がしい。コリャ若菜、若菜はいずれにある。いずれにある。

〽呼び立つ声は越前の三位通盛卿、陣屋の内とも思われぬ、須磨の浜辺の千鳥足。

ト、正面の襖開いて、越前三位平通盛、烏帽子に直衣姿、燗鍋、盃を手に、酔うた体にて出、三人よろしくこなしある。時員、通盛の手から燗鍋を取って下手に、若菜は上手に、通盛、中央にて、三人よろしくきまる。

通　盛　おったわ、おったわ。若菜、そもじは斯様なところで何していやった。

若　菜　アイ。

〽応えるそばより時員は。

時　員　畏れながら旦那様。

通　盛　なに、旦那様じゃ。オォ、そちゃ時員。そなたもこれにか。

時　員　はい。

通盛　斯様な所で、若菜、時員、二人して何をしていやった。
〽すかさず応える作り言。
若菜　わたしゃ、時員殿に打ち叩かれておりました。
時員　何を。
通盛　ナニ、時員が打った、叩いたか。コリャ時員、若菜を叩きし訳を言え。サ、下にいて。訳を言え。そちはなにゆえ女子をば、打ち打擲いたしたのじゃ。
〽居ずまいただし、侍は。
時員　畏れながらこの女子が、怪しき矢文を抜き取って、結びし文をいずこかへ隠せしを見咎めて、詮議をいたす今の仔細。ゆめゆめみだりなことではござりませぬ。
通盛　ナニ、みだりなこと。油断も隙もない男じゃ。そうして若菜、今時員が申せし文、そちゃ隠し持つのか。
若菜　わたしゃ文など知りませぬわいな。文じゃの何のと言いかけして、覚えなき罪の濡れ衣を私に着せる謀り事。オォ聞こえた。時員殿、御前どこぞのお女中さんと、文のやりとり、いたすのであろう。したがそのお女中はまさか源氏で。
〽時員きっと声荒らげ。
時員　コレ女、言うに言変え根も葉もない。そのままには捨て置かぬぞ。
通盛　オォ恐ワ。オォ恐ワ。恐やの恐やの。斯様に恐い顔するは、オォそうじゃ。コリャ時員、図星じゃな。どこぞの女中と懸想文やりとりいたすのであろう。陣中にて左様なことをぬけぬけと、テモマァ、隅に置かれぬ侍じゃなァ。ウフフフフ。
〽御酒機嫌。時員、膝詰め、座を改め。
時員　こは情けなき御仰せ。今危急存亡の秋の我が一門。大事の時に居合わせて、旦那様、あなた様はナァ。
ト、これより合方となり、
ここは陣中、賤しき女子をお側に侍らせ、酒酌み交わすなどとは、北の方小宰相様が御覧になればお歎き遊ばすはこれ必定。
通盛　ムム。
ト、このうちよき程に、熊王丸、毛衣の着付、山刀を背負い、下手藪畳より出、陣門に忍び寄り、様子をうかがう。
時員　かかる戦の習いとはいえ、畏れ多くも鳥羽の法皇様の姫宮上西門院様の御仲立にて御縁を結びし小宰相様は、御大将新中納言知盛様の御陣中にて、日ごと夜ごとに帝

の御警護。忠勤にお励みあそばす折柄。

通盛　黙れ。

時員　それにひきかえ旦那様は、かかる女をお傍に侍らせ、ここ一の谷へ御遊興まがいの体たらく。幼き頃よりお側に仕えし時員にはお情のうて。

通盛　黙れ、黙れ、黙りおれ。若輩者の分も弁えず便々とした諫言立て。あまつさえ、門院様の、小宰相のと、場所柄も構わぬ色恋話。斯様なこと、通盛疾うに忘れたわ。酔いが醒めた。若菜、酒じゃ、酒をもて。

若菜　畏まりました。

ト、上手障子へ行き、時員をふりかえり、思い入れあって、入る。通盛、身を横たえ、肘枕、檜扇で顔を隠し眠る体。時員、梯子を下り、門の方へ歩み寄り、通盛を見上げて思い入れ。須磨寺の鐘の音。上手屋体より、郎党一・二・三、灯台を持って出、よき所に置き、上手屋体に入る。時員、萎れた体にて上手へ行きかかる

〽すれ違う心も空の夕景色。峰吹きおろす一陣の春の嵐に冴えかえる陣屋の門へ慕い来る、陣笠まぶかき小宰相。

ト、向こうより、通盛妻・小宰相、陣笠、陣羽織、大小の拵えにて出る。熊王丸、小宰相に気づき、下手藪畳に入る。小宰相、七三にてこなしあって、

小宰　夜陰に紛れ、ここまでは来たれども、気にかかるは夫通盛様のお身の上。この一の谷を仰せつけられ、お別れ申せし折のお言葉。我いかにもなりぬとも、そなたは必ず生きよと、仰せあそばす一言。案じられてならぬわいな。

ト、思い入れあって、陣門へ来る。

お取次ぎ。お取次ぎ。

ト、時員、陣門に向かう。若菜、上手屋体より、燗鍋、盃を手に出る。時員、陣門を開け、

時員　あなたは北の御方様。

小宰　時員殿か。

時員　お懐かしゅうござりまする。

〽と迎え入れ。

ト、小宰相を迎え入れる。

若菜　時員殿。何事でございます。

時員　旦那様。旦那様。御方様が参られました。若菜殿、お取次ぎ。お取次ぎ。

若　菜　御方様とは解しかねます。最前あなたは北の方小宰相殿は、新中納言様の御陣中と申されたではございませぬか。

時　員　何にもせよ、御方様の御入来。取次ぎいたせ、若菜殿。

〈せっつく侍、侍女は煙たく。

若　菜　旦那様。旦那様。

通　盛　しばしの間、微睡みしか。若菜、酒の支度、調うたか。

時　員　旦那様。御方様が参られましたといなァ。

〈言葉に一瞥、いぶかしみ、

通　盛　ナニ、北の方が参ったと。

小　宰　通盛様。お懐かしゅうございまする。

通　盛　そちゃ小宰相。そなた、ここへは何しに来た。

小　宰　はい、御前を案じて。

通　盛　ナニ。

小　宰　アノ、いいえ。二位の尼君様から戦勝祈願の熨斗鮑、昆布、勝栗、これはすなわちその目録。御受納なされませとの仰せ、そのお使いに参りましてございまする。

〈としおらしく、

ト、懐より目録を取り出し、時員に取り次がす。

時員、通盛の御前に据える。

〈通盛、さっと色を変え。

通　盛　愚か者め。そちゃ、帝の守り役であろう。かかる大役を仰せつかりながら、御側を離るるとは何事ならん。あまつさえ、通盛が一の谷の陣を仰せつけられ、御大将新中納言様の陣中にて堅く言い置いたるわが思い、一の谷見舞うことは相成らん、来てはならぬと言い聞かす夫が言葉。そなたは心に留めぬか。

小　宰　その御不興、お叱りはもっともながら、三草山の合戦に、我ら一門大痛手と承り、思い出さるるあの夜一言。一の谷はいかがした、通盛様は御息災か、様子が知りたい、

〈飛び立つ思いは比翼の鳥、会いたさ見たさに天翔けるこの身に翼無けれども、暮るるを待ちかね。

ト、クドキよろしくあって、

尼君様の御許しにて、ついここまで、

〈妻の言葉も聞きやらず。

通　盛　ヤア、戦に臨んでは命なきもの。この通盛が討ち死にしたら小宰相、そなたは何とするのだ。

小　宰　討ち死などと、滅相もなきこと。

通　盛　未練の性根は武門の恥辱。かかる女を妻に持ったはこ

の通盛が一生の不覚。
〽怒りあらわの面相も、心に違う思いの丈、涙を呑んで言い放つ。
小宰相、そなたとの縁はこれまでじゃ。いずれへなりと疾く失せィ。
小　宰　なんと仰せられます、通盛様。
通　盛　コリャ若菜。今からはわれが女房。
〽驚く若菜抱き寄せれば。
ト、若菜を抱き寄せる。
若　菜　旦那様、スリャ真で。
通　盛　真も真、真実そのまま。
若　菜　ソンナラ私が越前の三位通盛様の。
〽北の方かと頬を染め。
通　盛　左様じゃ若菜。そちは嬉しいか。
若　菜　アイ。
通　盛　左様なれば善は急げ。義経の軍勢迎え撃つ、わが軍勝利の前祝いに若菜との祝言せん。オォちょうどよい、引出の品。祝いの品もあるからは、時員、祝言の支度せィ。
〽下より見上げる北の方、涙にまなこかき曇り、哀れ萎るる気色なり、
時　員　ソはあんまりな仰せ言。須磨の陣より一の谷へその御苦労もお厭いならず、御使者とはいえ、こう参られた御方様の御心のほど、旦那様、御推量なされて下さりませ。
〽言うもやらずに大音声、
通　盛　またしてもまたしても。身をわきまえぬ出しゃばり言。かくまで小宰相を思うなら、時員、そちがこの女を女房にいたせ。
時　員　何を仰せられます。
通　盛　別れの印じゃ、小宰相。サ、これ持って早うこの場を、立ち退け、立ち退け。
〽懐中より取り出だす、肌身離れぬ檜扇の要を一期と握りしめ、ハッと投げつけ天うち仰ぎ。溢るる涙ぐっと堪え。
ト、懐より檜扇を取り出し、通盛、縁に膝をついて、扇を握る思い入れあって、小宰相に放り、もとの座に直り、天を仰ぐ思い入れ。小宰相、檜扇を手に取り、開き見る。
小　宰　我が恋は細谷川のまろ木橋。この歌は。
〽ふみかえされてぬるる袖かなと、詠みもやられず涙を絞り、抑えかねたる思いの檜扇。

ト、これより合方となり、

わらわが今宵お訪ねしたのも、帝、二位の尼君様はじめ御同輩のお許しあって。それはめでたい、はや三位殿にお伝えせよとの尼君様の御心遣い。また、道中に気をつけよと、仰せ下されし帝の可愛らしい御声がいまだ耳に残りおります。通盛すでに三十になるまで、子というものを持たざるに、あはれ男子一人なりと、この世の形見にとおっしゃったお言葉をよそにせず懐胎なしたるこの身の幸せ。

通盛　なんと。

小宰　サ、その喜びもたった今。

〽一期の涙こぼれ落つ。通盛はっと傍らの若菜の尻目紛らわし、言葉厳しく言い放つ。

通盛　こは愚かしき女の浅知恵。夫の言葉翻さんと、子を孕んだという嘘偽り。左様な戯言聞くと思うか。

〽夫婦の縁の絆にや、妻は言葉に手にせし扇、思わず籠る女の力、めり、めり、めりと破りかけたる痛ましさ。

ト、小宰相、手にする檜扇を破りかける。通盛、小宰相を見て思い入れ。小宰相、半ば破れた檜扇に気づき、泣き落とす。若菜、小宰相を見て思い入れある。よき程に、小宰相、大小を携え、檜扇を拾い上げて立ち、檜扇を縁先に置き、陣門へ行く。時員、陣笠を取り、小宰相に渡し、両人、思い入れあって、時員、送り出す。通盛、小宰相を見送り思い入れ。よき程に二重の御簾を下す。小宰相、花道七三に行き、止まり、陣屋をふりかえり、思い入れよろしくあって、向うへ入る。時員、縁先に残る檜扇を目に留め、懐中にして、上手に入る。よき程に梟の声あって、御簾を上げる。

〽六甲山月半輪の春の夜更けの山おろし。雲の行き来に月影の光は消えて藪の中、夜陰に紛れ現るる、荒くれ無骨の賤しき姿、所の猟師熊王丸。

ト、熊王丸、下手藪畳より出、陣門近づき、様子をうかがい、指笛にて梟の声を作る。若菜、綿帽子、白無垢の拵えにて、上手障子屋体の内より出、忍んで梯子を下り、陣門に寄る。熊王丸、再び合図の梟の声を作る。

若菜　兄さんかいな。

熊王　兄じゃ。兄じゃ。

ト、若菜、門を開ける。

若　菜　兄さん。

熊　王　コリャ。

ト、若菜を制する。若菜、袖で口元をおさえるこなしあって、熊王丸を陣の内に入れ、若菜、熊王丸を梯子の前に導く。このうち、上手屋体の障子そっと開き、両人をうかがう様子。このとき、陣門を取り払う。

熊　王　コリャ妹、なにはさて、出かした、ようやった。

若　菜　そんなら兄さん、今の間の。

熊　王　この場の様子は藪の内、一部始終を見届けおいた。コリャ妹、そなたまんまと通盛めを垂らし込んだな。

〈兄の言葉のあられもなく、妹は嬉しさ恥ずかしさ。

若　菜　ナァ兄者人、それにつき、聞いてほしいことがあるわいな。マァちゃっとここにいてくださんせ。

ト、熊王丸の手をとり、梯子に腰かけるよう促す。

熊王丸、若菜を制し、

熊　王　話したきこと聞きたきことは兄にもある。したが便々ともしておられぬが戦のならい。最前の通盛の体たらく、陣屋の兵も戦用意ままなるまい。御大将、九郎判官様をはじめとして軍勢一万騎は、鉄拐山の頂に御到着。土肥次郎殿率いる七千騎は一の谷の西に回り、残る三千騎は鵯越の坂落としを駆け下らんとの御計略。その先達は俺が役目。俺が帰りを判官様、今や遅しとお待っておるわ。

若　菜　そんなら兄さん、判官様は鵯越を。

熊　王　月が山の端に消える時は、判官様の軍勢、この陣屋になだれ込み、通盛めを討ちとる計略。そなたの役目も最早や済んだ。よくぞ通盛めを腑抜けにし、陣屋の堅めを緩めやったな。兄の面目、この上なし。妹、出かした。礼を申す。サ、山の端に月の沈まぬうち、疾く疾く陣屋を兄とともに。

〈急き立つ兄をよそ目に見て。

ト、熊王丸、門の方へ歩みゆく。若菜、思い入れあって、

若　菜　アァもし兄さん。ちょっと待ってくださんせ。

熊　王　待てとは何じゃ。この陣屋に、大事の品でも取り置いたるか。

若　菜　いいえそうでは、ござんせぬ。

〈雲間を覗く月明り、兄は妹の姿にびっくり。

熊　王　コリャ妹、そのなりは。

若　菜　これじゃによって、わたしゃ厭でござんす。

熊　王　妹、わりゃ通盛めにたぶらかされたか。

若　菜　わたしゃ、通盛様の女房じゃ。

熊　王　何を愚かな、馬鹿々々しい。通盛が戯言に気が上せたか、コリャ妹。考えてもみよ。通盛めは雲の上人。越前の三位という官位のある平家の公達。我らは無位無官の地下の狩人。わずかな日数を側に置く女をにわかに妻にするなど、真のはずがなかろうわェ。

若　菜　さりながら、北の方、小宰相様の御懐胎とのお言葉にも動ぜず、私を女房にするとの仰せ、女を騙すお心とは思われませぬ。

熊　王　そんなら妹、われと兄とは平氏と源氏。敵となって争うことになるのじゃぞ。

若　菜　じゃによって、厭でござんす。

熊　王　ならばその白無垢を脱ぎ捨てて、兄とともに。

若　菜　そんならみすみす手に入りしこの身の幸せ、喜びを捨ててこの場を立ち退けと。

熊　王　オォサ、それがわが身出世の足掛かり。これより戦で兄が上ぐる功名手柄が、われの幸せを呼び寄せるのじゃ。ナァ妹、こと聞きわけて、これだ、これだ。

〽と手を合わせ。

ト、若菜に手を合わせる。

月が入るさの山の端に隠るる時は、判官様の三千騎が鵯越を駆け下り、一の谷へ攻め寄する手筈。それじゃによって兄と一緒に。

若　菜　ソリャ兄さん、胴欲じゃ、胴欲でござんすわいな。生れて初めて肌身に添わすこの真綿。これも皆、通盛様の真心から。それ捨てて立ち退けとはあまりのお言葉。源氏ばかりが侍ではござりませぬ。帝を奉ずる平家こそ、武門の随一。妹が幸せ、大事と思うて下さるなら、兄さん、これでござんす。

〽妹も兄に手を合わす。

兄さん、後生でござんす。

熊　王　エェ聞き分けのない。真綿御仕着せに目がくらみ、嘘を真と思い違う愚か者。じゃというて、置いても行けぬわが妹。

〽思案のほかの恋の闇。兄は忠義に心を決し。

そんなら妹、わりゃどうしても。

若　菜　アイ、厭でござんす。

〽背を向けたれば、山刀、ぐっとつかんで振りかぶり、

ト、若菜、兄に背中を向ける。熊王丸、背負う山刀を手に取り、妹を討つ構え。よき程に奥より通盛、声にて、

通　盛　厭とは何じゃ、コリャ若菜。わしと添うのは厭と言うか。

ト、正面の襖より、通盛、手燭を持ち、直衣姿で出る。若菜、背後に熊王丸をかばい、両人、梯子のもとに控える。通盛、縁先に立ち、若菜を見下ろし、熊王丸に目を遣り、

通　盛　コリャ若菜、そなた気の多い女子じゃな。今こなたの隠しおるこの男は何者じゃ。

若　菜　隠すなどとは滅相もない。何で私が左様ないたずら。

通　盛　オォ聞こえた。最前時員が申しておった矢文の主、アリャこの男であろうがな。わが女房に懸想する怪しき男、様子を語れ、なんと、なんと。

〽手燭掲げてうかがい見る。

若　菜　何をあなたにもったいない。三位様、コリャ、私の兄者人でござりまする。

通　盛　ナニ、兄じゃ。兄と言うても憎からぬその出で立ちは、ほかでもない忍ぶ恋路を辿りくる情けの深い兄であろう。

若　菜　いいえ、まことの兄者人。これ兄さん、御前も一言申し訳なされませィなァ。

〽妹の言葉に詮方もなく大きな体、膝折り、腰曲げ、背をかがめ、両手をついて頭を垂れ、

熊　王　お初にお目にかかりまする。いま、この者の申す通り、俺はこいつの兄めにござりまする。

通　盛　そうか、兄か。名は何と申す。

熊　王　熊王丸という不束者、以後お見知りおき下さりょうならば大慶至極。

通　盛　こは屈強の快男児。若菜の兄の熊王丸、生業は何をいたす。

熊　王　俺が生業。

〽気遣う気配に、通盛が。

通　盛　言いにくくば言わずともよい。その身なり拵えより推量すれば、この山々谷々の狩人にても相違あるまい。いかがじゃ、熊王丸、わが推量は的を射たか。

〽詰め寄る言葉の切っ先を、兄に代わって妹は返し、

若　菜　アイ。この山間の狩人でござりまする。

通　盛　その狩人がこの陣屋へは。

〽何しに来たと矢継ぎ早、応えかねた兄見かねて、こ

れも妹が。

若　菜　はい。私から申し上げます。女ながらに出過ぎた真似とのお叱りを受けることとは存じながらも、三位様、わが兄を御家来衆にお取り立て下さりませ。

〽聞いてびっくりどんぐり眼、熊王丸は怒りに震え、飛び立ちかかる勢いを妹はぐっと押しとどめ。

ト、熊王丸、立ちかけてキッとなる。若菜、熊王丸を制するこなしあって、

それこの通り、飛び立つ思い、必ず必ずお役に立つと存じまする。

通　盛　熊王丸とやら、平家の侍になりたいとな。

〽返事やられず南無三宝。応とも言えず、また否と言えぬ苦しさ胸の内、むなしく仰ぐ月影は山の端近くかかりける。

ト、熊王丸、きっと思い入れよろしく、夜空を仰ぎ、うろたえるこなし。通盛、とくと熊王丸を見て、

そううろたえることとてなし。さりながら、心にかかることありや。

熊　王　お取り立て下されば、この身の幸い、心にかかることとても、ござりませぬ。

通　盛　左様なれば、この後は兄妹ともども、この通盛に奉公なすか。

若　菜　はい。三位様、私ともども兄者人も。

通　盛　相分かった、若菜。こなたの兄の熊王丸。今から通盛が侍に取り立てつかわす。熊王丸、近う。若菜もこれへ。

熊　王　ハハァ。

ト、梯子の下に控える。若菜、梯子を上り、通盛の下手に控える。

通　盛　奉公の手始め。こなたに尋ぬる仔細あり。

熊　王　身に覚えのあることなら、なんなりとお答え申し上げまする。

通　盛　しからば尋ねん。九郎判官義経の軍勢、我が陣の北に聳えたる鵯越に立つ時は、西に下って浜に出づるや。また、鵯越を駆け下り、この陣屋に攻め寄せるや、推量いかに、熊王丸。

熊　王　ハテ知れたこと。鵯越は、人、また牛馬の通う道とてなし。道なき崖を馬にて下るなど愚かなことでござりまする。

通　盛　人、牛馬は通わねども、鹿はいかがじゃ、通うか否か。

どうじゃ、どうじゃ。
〽ぐっと詰まって熊王丸。
狩人のこなたならば、知らぬこともとよりあるまい。もしまた知らぬと言う時は、こなたの言葉に偽りの影の生ずることもあらん。答えはいかに、熊王丸。

若　菜　三位様、兄は口下手。奉公始めに気が張って返事もなかなか。そのお答えはこの若菜が。

通　盛　ナニそなたが答えるとな。

若　菜　アイ。人や牛馬は通わねど、鹿なれば易きこと。世の中暖こうなれば草の深きに臥そうとて播磨の鹿は丹波へ越え、また、寒うなれば雪の浅きに草葉を食まんと丹波の鹿は播磨へ通う。その道筋はすなわちあれなる鵯越。

通　盛　熊王丸、妹は鹿が通うと申すぞ。鹿が通うものなれば、判官きっと鵯越を駆け下て一の谷を攻めるであろう。

熊　王　イヤさりながら、鹿と馬は違う獣。これを取り違えては唐土の故事に曰く、趙高が身の誹り。馬鹿なことだァ。

通　盛　丈三十丈をなすと言い、また絶壁の中程には十五丈の岩鼻をひかえる鵯越。馬にて下るは痴れ者の所業。されど、奇策にたけし義経。ウム、鵯越の坂落としじゃな、熊王丸。褒美をとらす。

ト、直衣を脱ぎ、熊王丸に放り投げる。通盛、下に用意の甲冑姿となって立つ。若菜、驚き、梯子を下り、熊王丸の傍に立つ。熊王丸、山刀を手に悔しがるこなしある。

わが後白河の法皇様より賜りしその直衣、それを褒美に立ち去れ、兄妹。

熊　王　こは汚らわしき長袖衣。サテはみすみす謀られしよな。
ト、ドンチャンになり、陣太鼓、鬨の声上がる。
矢が、上手屋体、桜の立木に射込まれる。熊王丸、若菜の手を引き、花道へ向かう。若菜、熊王丸の手をふり払い、

若　菜　兄さん、さらばでござんす。

熊　王　ウムム。妹までもこの兄を謀りおったか。かくなる上は、妹、覚悟。
ト、若菜と立ち回り。よきほどに、向うより、小宰相、走り出て、陣屋に来る。

小　宰　通盛様。源氏の軍勢鵯越より雪崩を打ってこの一の谷へ押し寄せておりまする。
ト、熊王丸、小宰相を見て立ち回りよろしくあって、若菜、小宰相をかばい、熊王丸の山刀にかか

り、手負いとなる。

熊　王　コリャ妹、なにゆえわが手に。

若　菜　小宰相様は、斬らされぬ。

小　宰　若菜殿。

ト、小宰相、若菜を介抱する。時員、上手より甲冑姿にて出、熊王丸を追いたてる。熊王丸、花道七三にて、

熊　王　エェ妹をわが手にかけしか。

ト、無念の思い入れあって、向うへ入る。小宰相、時員、若菜を介抱し、

通　盛　若菜、大事ないか。

若　菜　アイ。

小　宰　なにゆえそなたわが身を捨てて。

若　菜　アイ。

ト、合方となり。

通盛様の御胤をお宿しなさる御方様、兄者人に斬らせるわけには参りませぬ。間者となって入り込みましたが、日頃、通盛様のお側に仕え、お人柄、お心遣いにふれますうち、いつしか募るいたずら心。源氏に与する兄を裏切り、鵜越の獣道、申しあげたも三位様をお助けしたい心から。ご計略とは知りながら、最前あなたにかき抱かれ、これこのような真綿の御仕着せ。

〽この白無垢が冥途の土産。

御方様。

小　宰　オイノウ。

若　菜　御方様は大事のお体。早くこの場を。

小　宰　それじゃと言うて、命かばうてくれた御前をこのままここへは。

若　菜　三位様。旦那様。源氏の軍勢攻め寄す前に、少しも早く、御方様を。

〽言葉に通盛涙を絞り、

通　盛　若菜、よくぞ申した。それでこそ我が女房。時員、小宰相を連れて、須磨の陣屋へ落ちのびよ。

小　宰　いいえ、通盛様。わらわもともに。

通　盛　何を言う、小宰相。そなたの命救いくれた若菜の思いを無にするか。

若　菜　御方様、御息災で。必ずよき御子を。

ト、落ち入る。小宰相、泣き落とす。ふたたびドンチャンとなり、鬨の声あがる。

通　盛　時員

時　員　ハッ。

通　盛　小宰相を頼むぞよ。

時　員、命に代えましても、必ずや。

ト、小宰相の手をとり、花道に行く。向うより、源氏の侍十人、陣屋に押し寄せる。時員、小宰相の手を引き、源氏の侍と立ち回りよろしく。通盛、縁先に立ち、

通　盛　小宰相、堅固で暮らせ。

小　宰　通盛様。

ト、時員の手に引かれ、向うへ入る。源氏の侍、通盛を取り囲み、よきほどに、向うより、熊王丸、山刀を手に甲冑姿で出、花道七三に止まり、

鷲　尾　越前の三位通盛卿。

通　盛　こは訝しき熊王丸が姿。

鷲　尾　熊王丸とは昔の名。只今は九郎判官義経様が身内にて、鷲尾三郎義久という侍。今改めて見参なす。

通　盛　これは小賢しき鷲尾三郎。

鷲　尾　妹の敵。

通　盛　女房の仇。

鷲　尾　功名誉はわが目前。

通　盛　ならば手柄に討って見よ。

ト、陣屋の内、源氏の侍と大立ち回りよろしくあって、通盛、手負いとなり、よき程に、二重に上り、義久と立ち回りよろしくあって、源氏の侍、下にて陣屋を取り囲む中、通盛、義久、引っ張りの見得よろしくあって、幕。

第二幕　淡路の瀬戸御座船の場

役　名

通盛妻　小宰相局

通盛乳母子・滝口時員

安徳帝

源氏の軍兵六人

大納言乳母

治部卿局

二位尼平時子

越前三位平通盛の霊

本舞台、浅葱幕。浪音にて幕あく。

ト、すぐ八島の謡になり、

〽今ははや、闇浮に帰る生き死にの、海山一同に震動して、舟よりは鬨の声。月に白むは剣の光、潮に映るは兜の星の影、水や空、空行くもまた雲の波の、うち合い刺し違える、舟戦の駆け引き。

ト、浪音になり、柝につき、浅葱幕振り落とす。

本舞台、向う打ち抜き瀬戸の海原、雲垂れこめる未明の遠見。すべて淡路の瀬戸海上の体。真中に舞台一杯の御座船、白木の屋形、障子閉しあり。船べりに仕掛けあり。上手に舳を向け、屋根の軒口に赤地揚羽蝶の紋の幕を張る。舞台一面に浪布。

〽ぬばたまのよるべは浪に隔たりて、八島遥けき御座船に、疾風のごとく迫りくる、源氏の軍兵。

ト、このうち、上の方より屋形の柱に、矢が射こまれ、突き刺さる。上の方より小舟二艘、源氏の軍兵各三人を乗せ、御座船に漕ぎ寄せる。

軍　兵　平家の御座船これにあり。手柄は目前。それ。

軍兵ら　オォ。

〽声聞き留めて小宰相、長刀携え。

ト、小宰相、屋形を出て、キッとして見得。

小　宰　平家に仇なす源氏の侍。

ト、船中に乗り込む軍兵と立ち廻り。このうち、船を廻し、舳、花道の方へ向く。奥より小舟一艘、時員、大小、弓を手に、靭を背負う甲冑姿でこれに乗り、軍兵に梶を取らせ、御座船に漕ぎ寄せる。時員、弓にて、御座船に乗りこむ源氏の軍兵を射る。矢に撃たれし軍兵、海中に落ちる。

時　員　小宰相様。

小　宰　時員殿か。

ト、軍兵二人を斬り、海中に没する。時員、小舟の上にて、源氏の軍兵と立ち廻りよろしくあって、源氏の軍兵皆討たれて海に沈み、小舟二艘、下手に流れ入る。時員、小舟を御座船の艫の辺りに寄せさせ、

時　員　小宰相様、御無事でござりまするか。

小　宰　オイノゥ。

時　員　須磨の浦にてお別れ申せし折、どうか御無事で八島までと思いましたが、

〽思うに違うこともなく。

御息災でよろしうござりまする。

小　宰　そなたも堅固で。

〽互いに励ます言葉と言葉。

シテ、三位様は、通盛様は。

〽いかがした、御無事であろうと矢継ぎ早、乳母子きっと口引き結び。

時　員　旦那様は。

〽しおたれ顔に立つ波と風に砕けて声細々。

小　宰　なんとした。いかがした。エェもどかしい、時員殿。

チャッとここへ、

〽招き上げ。

ト、時員を招き、時員、舵取りの侍とやりとりあって御座船の裏に舟を廻し、御座船に上る。小宰相、時員の手をとり、艫の辺りに共に住まう。

よくぞ無事で時員殿。こうして命あることこそほんに何より、何よりじゃわいなァ。

〽励ます声に面目なく、頭うなだれ、言葉も失せ。

面をあげや、時員殿。シテ、三位様は御息災か。通盛様は無事であろうな。コレ。

〽詰まる答えは無念の涙、声震わせて。

時　員　旦那様は。

小　宰　通盛様は。

時　員　見事。

小　宰　お手柄をお上げになったか。

時　員　エェ、

〽見事。

一の谷の陣中にて、見事、討ち死。

小　宰　なんと。

時　員　お果て。

小　宰　エェ。

時　員　お果てなされてござりまする。

〽泣く音聞き留め、二位の尼、

ト、小宰相、泣き落とし、二位尼、屋形の内より声あって、

二　位　ナニ、越前の三位通盛卿、一の谷にて、討ち死にせしか。

〽屋形を出ずる尼御前、帝の手を引き御乳の人大納言、治部卿の局ともどもに船端近く身を寄せ合い。

ト、屋形より、二位尼、出て、つづいて、大納言乳母、安徳帝の手を引き出、後に治部卿局、出て、

皆舳の方に住まう。小宰相、時員、舳の方に向き、
平伏する。

二　位　小宰相が夫、越前の三位通盛卿、武勇優れしと聞き及びしもあい果てたるか。

大　納　戦のならいは是非もなし、とは申しながら思えば不憫なことじゃなァ。

治　部　まして小宰相は今、通盛卿の御子を宿す身の上。いずれ産まれ来る赤子、夫に抱かせてもやりたかったであろうな。

大　納　さてもさても、

治部・大納　ままならぬ世の中じゃなァ。

〽声改めて、二位の尼。

二　位　時員とやら。

時　員　ハハッ。

二　位　一の谷の戦、通盛が生涯の有様、小宰相に語ってやりゃ。

時　員　畏まってござりまする。

〽声励まして時員が、物語らんと座を構え。

ト、居ずまいを正し、

夜も明けやらぬ一の谷、俄かに起こる蹄の響き、鬨の声。

〽義経の軍勢三千騎、雪崩を打って押し寄せたり。谷に山彦声荒らげ、一万とも十万とも聞こゆる軍勢を、迎え撃ちたる通盛卿が御働き。ここを先途と鬼神の勢い。さりながら、義経火攻めと矢を撃ち掛け、

〽折しも悪風下ろしきて、屋形、仮屋もたちまちに黒煙なし、燃え上がる。

陣屋の有様。ハヤこれまでと兵ども、海の方へと落ちのびゆく。通盛卿はただ一人、陣にとどまり、東国の荒くれ武者と鎬を削り、容赦もなく敵方の首討ちとっていたりしに、アレ、赤地の錦直垂に唐綾縅の公達はまさしく平家の御大将と、

〽詰め寄る敵にとりこめられ。

鷲尾三郎義久と名のり合い、終に討たれて。

ト、ドンチャンになり、鬨の声あがる。

安　徳　尼御前、あの声は。

二　位　アレあの声はこの御船へ迫りくる源氏の兵。

大　納　御上、屋形の内へ。

治　部　お入りあそばしませ。

〽うちうなずいて安徳帝、乳母ともに入りにける。

ト、大納言乳母、安徳帝の手を引き、屋形に入る。

治部卿局もつづいて入る。

二　位　時員、大儀。小宰相、通盛卿の立派な最期。聞いてそなたも安堵したであろう。この後はともに菩提を。

小　宰　御言葉、忝う存じまする。

時　員　それがしはこれより、旦那様の弔い戦。冥途の御供に遅れぬよう。

二　位　左様なれば、戦の餞、盃とらす。時員、屋形の内へ。

時　員　ハハァ。

ト、二位尼に一礼する。二位尼、屋形に入る。時員、小宰相に向き、懐より、檜扇を取り出し、この扇は、旦那様、小宰相様、御夫婦の縁を結ぶ大事の御品。

〽供養もともにと、乳母子が手渡す扇、胸に抱き、

小　宰　時員殿。

時　員　小宰相様、御方様は大事の御身。御短慮なこと、なされまするな。

ト、屋形に入る。

〽小宰相はただ一人、今生ははや淡路の仇波、夫の魂魄今いずこと、形見の扇うちまもる。紅、緑、白、紫、黄に薄紅を加えたる、六つなる色の飾り紐、ほどけば開く檜扇の半ば破りし片つ方。

小　宰　わが恋は細谷川の丸木橋ふみ返されて

〽ぬるる袖かな。

お懐かしい、通盛様。

〽また片端の水茎は。

ただたのめ細谷川の丸木橋ふみ返しては落ちざらめやは。

〽門院様の御歌なる。

思い出だすは安元の春、

〽上西門院様に御供し、法勝寺の桜狩。同じく供奉なす通盛卿、一目互いに目を交わし、思い、情は胸の内。はかなく過ぎる年月の、三年を忍び耐えかねて、恋ぞつもりて文となる、夢の通い路踏み迷う。色に出にける憂いの影。女院は察して筆執り給い、えにしを結ぶ御情け。はかなき契り世の乱れ。源氏平家の合戦に、都を落ちて西海の八重の潮路にただよえる憂き身に残る檜扇が二世の縁の夫の形見。

ト、このうち、小宰相、さまざまに思い入れよろしくあって。

小　宰　そうじゃ、入道相国清盛公は、音戸の瀬戸にて、西に入る日を惜しませ給い、扇を向けて中天に日を返せしと

いう。わが夫通盛様も御血筋。わが身に残せしこの檜扇、夫の一念籠るならば、清盛公の扇にならい、返させ給え、通盛様。

〽とうち招けば、不思議やな、浪に浮かびし御面影、まざまざと生けるがごときおん姿、ゆられゆられて慕い来る。

ト、このうち、小宰相、舳の方に立ち、檜扇を開き、海に向ける。遠見の月、雲を出る。浪音高まり、ドロドロとなり、花道すっぽんより通盛の霊、弓矢、大小、手負いの甲冑姿にてせりあがる。

〽夢か現か波枕、見ぬ行く末も見しことも仮の宿りの幻か。沈み浮かびて見え給う、冑を帯し、兵具いみじき御姿。

ト、このうちに、通盛の霊、御座船へ慕い寄る。小宰相、通盛に目を留め、思い入れあって、

小宰　わが夫か、通盛様か。

〽呼べど答えず、魂魄の声仇波に奪わるる。

ト、通盛、舳の方に来て住まう。

小宰　通盛様。どうぞ御声を聞かせ給え。通盛様。

〽扇翳して、うち招けば、不思議や奇特、波だに音をうち鎮め、

通盛　小宰相。無事であったか。

小宰　はい。

通盛　武門に生まれし越前の三位通盛が働き見するは合戦の場。とは思えども、これまでの戦において、敵とはいいながら、見も知らぬ罪なき者の首討つ悲しさ。戦の習い、是非なきこととは知りながら、もののふに生まれたるも前世の報い、我が定め。

〽波白々と明石の浦、須磨の浦より西海の波に漂う憂き別れ、

通盛　われはこれより弥陀の浄土へ赴かん。さればこそ、そなたに言い置く契あり。小宰相、よく聞け。

ト、合方となり、

通盛　いくさは常のことなれば、日頃はかくして言わざりしが、夫婦は二世の縁とやら。来世も同じ蓮台の。

〽露の契の涙の玉、声をしぼって北の方。

小宰　必ずともに。

通盛　三十路となりし通盛が、そなたに残す忘れ形見、夫婦の契り結びし檜扇。

〽この世の絆とねんごろに、わが形見とて忘るるなと、

うちまもり、うちまもり、

通　盛　わが北の方、小宰相。

小　宰　わが夫、通盛様。

通　盛　汝は命捨つべからず、必ず生きよ。

〽淡路の瀬戸の浦波にゆられゆられて消えゆく面影、
この世の修羅の苦しみを離れて霞む御姿、菩薩もこ
こに来迎の成就得脱法の海、忍辱慈悲の波枕。

小　宰　わが君様。

ト、このうち、通盛の霊、小宰相、思い入れよろしく、浪音となり、通盛の霊、花道すっぽんへ行き、下がる。安徳帝、屋形を出て小宰相を見る。小宰相、舳に立ち、月に檜扇を振りかざす。

小　宰　扇の威徳もこと切れしか。通盛様。

〽月うちながめ、扇をままに合掌し、

ト、思い入れ。

小　宰　我が身もこの世に思いもなし。一切衆生、皆仏道に入れしめたまえ、

〽今生に別れを告ぐる方便品、尽きぬ迷いの雲晴れて
はるかに照らす法の月。

安　徳　小宰相。

小　宰　はい。

安　徳　いずこへ参る。

小　宰　わらわはこれより、月の船にて西方極楽弥陀の浄土へ参りまする。

安　徳　朕も行こう。

小　宰　御上はこの後ともに御息災でおわしませ。

安　徳　行こう。

ト、舳へ向かう。

小　宰　なりませぬ。

〽と懐に抱き留め、

ト、安徳帝を胸に抱き、思い入れあって、安徳帝を屋形の方へ住まわせる。

小　宰　御上、おさらばでござりまする。

ト、舳へ行き、空を仰ぎ合掌する。安徳帝、小宰相の後につき、舳へ向かう。屋形の内より、二位尼の声して、

二　位　早まるでない、小宰相。

ト、屋形を出る。後より大納言乳母、治部卿局、出て、二人、安徳帝の傍にを住まう。二位尼、舳の小宰相のもとへ行き、

二　位　この世ばかりか未来まで変らぬ夫婦の通盛が思い、無にしてなるものでない。浄土へ向かう通盛の手向けはコレ。

ト、小宰相の上着を脱がせ、海原にふわりとなげる。上着、波に漂う。

時員、これへ。

時　員　ハッ。

ト、屋形を出る。

二　位　小宰相、そなたはこれにて舟を下り、時員の案内にて、比叡山横川の僧都を頼み、夫通盛卿の菩提を伴う仏の旅路。時員、早ヤ参れ。

時　員　ハハァ。

ト、小宰相、傍らの長刀で髪を切ろうとする。二位尼、これをとどめ、

二　位　早まるでない。小宰相。髪を下ろすは、通盛卿が御子を産みし後。

小　宰　尼御前様。

二　位　早ヤ行け。

ト、時員、小宰相とともに御座船を下り、小舟に移る。

〽誰が呼ぶとはしらなみの涙の別れ、憂き世の習い、梶音ばかり鳴る海の淡路の島の島影に漕ぎ離れ行く。

安　徳　小宰相。堅固で暮らせ。

ト、舳に立ち、後ろに二位尼、大納言乳母、治部卿局、小宰相と時員を見送る。浪音となり、浪幕、船端に寄せ、小宰相、檜扇を翳す。安徳帝、合掌するのを柝の頭。皆々きまり、

〽あと白波と。

皆々合掌し、浪音にて、幕。

安樂井（あらい）　薫（くん）
東京都在住